

通常学級における気がかりな姿のある児童生徒への支援

ー 認知の特性に視点をあててー

はじめに

現在、小・中学校等の通常学級において、人とのかかわりに課題があったり、授業中に席を離れたり、計算は得意だけれど、図形の問題が極端に苦手だったりするなど、気がかりな姿のある児童生徒が増えています。こうした児童生徒に対して、どのような支援を行ったらよいかを悩んでいたりと、困っていたりする教師が多いのが現状です。気がかりな姿が見られた場合には、その子の生育歴、家庭環境、知的発達水準、認知の特性等をとらえ、全体像を把握することが必要です。いわゆる、多面的・総合的理解です。全体像を把握し、目標を立て、支援の方針等を考え、実際に支援していく過程では、気がかりな姿のある児童生徒の中に、音声言語のみで説明されると分からなかったり、その場の雰囲気から自分の行動を考え、実行することが苦手だったりするなどの子どもがいることに留意することが大切です。分かり易い学習の仕方は、児童生徒一人ひとりみんな違います。

本稿では、分かりやすい学習の仕方と密接な関係のある「認知の特性」を視点にして、気がかりな姿のある児童生徒への支援について、その概略を説明します。



I 認知の特性について

1 「知覚」と「認知」と脳の働きについて

他の人の会話中に勝手に話しかけないこと、授業中に席を離れないこと、図形の問題の解き方を学習することは知覚や認知、認知処理過程ということが関連します。

(1) 「知覚」→「認知」(脳で 見る・聞く・触る・嗅ぐ・味わう、記憶する等) について

認知とは、人間などが外界にある対象をそれが何であるかを判断したり、解釈したりする過程のことです。友達の表情を見て、いやがっていることが分かるとか、場の雰囲気をよむとか、図形の形の違いが分かるなども認知と関連があります。人は、ある事物や事象をとらえる場合に、得た情報を簡略化して記憶します。これを符号化といいます。何を符号化してるかは人それぞれで、児童生徒の中には、友達の表情と感情、自分の取るべき行動等を符号化することが苦手な子どもがいます。

私たちは、事物や事象を認知する場合に、視力、聴力等を使います。例えば、くだものりんごを認知する場合、視力を使ってりんごの形や色などを知覚します。また、「りんご」という文字を提示されれば「りんご」という文字を知覚します。聴力を使って、「りんご」という音声を知覚します。同様に、触れる、嗅ぐ、味わうことを通してりんごの全体像を知覚していきます。さらに、脳が機能し、脳の器官である側頭葉に短期記憶され、自分にとっての重要度によって、海馬や扁桃体等に「りんご」の形や色、臭い、味等が長期的に記憶されていきます。りんごを持ったとすると、その時の質感、持ち方等も人の「注意」次第で、記憶されていきま

す。このように脳が機能してものをみるものが「視覚」、脳が機能して聞くことが「聴覚」です。この他、五感といわれる触覚、嗅覚、味覚も脳が機能しています。このように事物や事象を認知するという事は、脳が機能します。気がかりな姿のある児童生徒の中には、脳の機能に課題がある場合があります。



(2) 認知処理について

認知科学の分野では、知能を知的活動を行う際の認知処理過程としてとらえて理解しようとするグループがあります。彼らによると、人の認知機能は、プランニング、注意、同時処理、継次処理の4つの過程に基づくと言われます。プランニング (Planning) とは、席に座るなどのその場に応じた行動や、図形の問題はこう解くなどのいわゆる課題を解決する時に、脳の海馬等に記憶されている知識や技能等と照らし合わせながら、自分の行動や課題解決の方法を決定し、選択し、適用し、評価する過程のことです。主に脳の前頭葉が働きます。注意 (Attention) とは、一定時間提示された競合する刺激に対して、妨害刺激に対する反応を抑え、特定の刺激に選択的に意識を向けることです。例えば、私たちは日頃、いろいろな音が混在している状況の中で生活しています。暖房や冷房の音、他の人の話し声、自動車の音等が聞こえる中で、先生の説明を選択して聞くなどもこの注意と関連します。注意は脳の脳幹が働きます。同時処理 (Simultaneous) は、分割された情報を単一のまとまりにまとめる過程で、継次処理 (Successive) は、複数の情報を特定の系列順序で統合することです。例えば、清掃を行おうとする場合、私たちは清掃について、その全体を把握してから始めます。これが同時処理です。次に「ほうきを用意する」「はく」「ごみをあつめる」等の活動の流れを一つ一つ確認しながら行います。これが継次処理です。同時処理・継次処理は、後頭葉、頭頂葉、側頭葉が働きます。児童生徒の中には、脳の障害によって、プランニング、注意等の認知処理が苦手な子どもがいます。

一方、全体の知能を言語性知能、動作性知能に分けて解釈しようとするグループがあります。彼らは、人が課題解決をする際には、言語的知識や視覚的知識を最大限に使っていることに着目しています。言語性知能や動作性知能を言語理解、注意記憶、知覚統合、処理速度の4つの指数で分析しています。言語性知能が動作性知能よりも高い場合は、聴覚優位であり、動作性知能が言語性知能よりも高い場合は、視覚優位です。簡単に言えば、見ている絵や写真、その場の状況について音声言語でその意味やとるべき行動等を説明されれば分かりやすいのが聴覚優位、音声言語での説明のみではなく、絵や写真を交えながら話されれば、分かりやすいのが視覚優位であるということです。

2 認知の特性について

前項で説明してきたように、知覚や認知は、人によって違うことが分かっています。同じものを見ても、理解した内容や反応が違います。また、個人内でも次のように、視覚、聴覚、触覚等の五感に違いがあることが分かっています。具体的には、聴覚的な処理が苦手であるために、聞いただけでは意味が分からないけれど、視覚的な処理が得意で、図や絵をみれば課題が解決できる人もいます。このように、一人一人にある独特の認知を「認知の特性」と呼んでいます。気がかりな姿のある児童生徒一人一人の認知の特性をとらえ、支援の方法を考えていくことが大切です。認知の特性を知る一つの方法として、DN-CAS、WISC-III、K-ABC等の心理検査があります。

Ⅱ 気がかりな姿に対する認知の特性に配慮した一般的な支援上の留意事項

この項では、気がかりな姿のある児童生徒の認知の特性に配慮した支援について説明します。

気がかりな姿のある児童生徒の中には、説明を聞いたり、絵や写真を見たりしても、その内容が分からなかったり、情景などのイメージを持てなかったりすることに困っている子どもがいます。支援を考える場合に、分かりづらさや困っていることを軽減してあげることが必要です。例えば、視覚優位の児童生徒の場合は、音声言語で話されるとイメージが持てないけれど、図や絵を使って説明されると分かりやすいという認知の特性に配慮します。

以下に認知の特性の主な類型と支援の一般的留意事項を記述します。

☆視覚優位…話し言葉の他に、図や絵など視覚的な手がかりを用いる

☆聴覚優位…図や絵をもとに課題を解決する場合や、場の雰囲気を読む時

には、図や絵、その場の状況を示しながら、話し言葉で説明したり、ことばで定義づけたりする。

☆視覚、聴覚ともに優位、ことばの理解・操作が苦手…図や絵、写真等、視覚的な手がかりを用いる、具体物を使用する。簡単なことばで説明する。

☆視覚、聴覚ともに優位、空間的な情報の把握・処理が苦手…ことばで定義づける、一つずつ順を追って、説明する。具体物の操作を設定する。



Ⅲ 気がかりな姿のある児童生徒の認知の特性を視点にした支援

ここでは、認知の特性に視点をあてた支援について、A君（仮想）を例に説明します。

氏名 A君（小学校3年生通常学級に在籍）

<日頃の様子>

【生活面の気がかりな姿】

片付けが苦手な、テレビゲームなどはいつもやりっぱなしである。着ている衣服も乱れていることがある。忘れ物やなくしものが多く、大切な通知もどこかになくしてしまう。担任から指導されても変化がない。アニメのキャラクターを描くのが好きで、本を見ながら描いている。

【学習面の様子】

写字の際、「か」と「や」、「あ」と「め」、「い」と「り」などを書き間違えないのに、作文やメモになると間違えることがある。計算は得意であるが、文章題が苦手な、やる気がない。

【行動面の様子】

会話の途中で話に入ってくることもある。電車やバスに乗っても入口付近にずっといるので、他の人のじゃまになることが多い。

<検査の結果>

【WISC-III】

言語性下位検査の評価点 10.0 動作性下位検査の評価点 7.0 等

※ WISC-IIIの評価点は10.0を平均にしています。動作性下位検査の評価点が7.0であるので、言語性：音声処理過程の能力が優位であると思われます。

<考察>

上記のA君の日頃の様子、検査結果等から次のようなことが分かってきた。

○予測することが苦手…「入口付近にずっといる・・・」ということ、検査中の行動観察、検査結果等から、どう行動したらよいか、こうするとどうなるかを予測することが困難



○状況を見て、自分が何をしなければならいかを考えることが苦手 …片付けが苦手なこと、衣服の乱れを見ても直さないこと、会話に入るタイミングが悪いこと、検査結果等から、状況を見て、考えることに困難さがある。

○視覚刺激をそのまま取り入れるのは得意…写字は間違いがないこと、アニメのキャラクターを本を見ながら描いていること、検査結果等から字をそのまま写す、キャラクターをそのまま描くということは得意である。

○聴覚優位…検査結果から、聴覚優位の可能性が高い



上記の特性を踏まえ、生活面、学習面、行動面の気がかりな姿への支援の方針は次の通りである。

<気がかりな姿に係る支援の方針>

【生活面】

☆後片付け☆

- ・ゲームなどが散らばっている状況を見せて、片付けを言葉で説明する。
- ・片付ける手順を表にして掲示したり、何をどこにしまえばよいか分かるように引き出し等に入れるものの名前を書いておく。

☆衣服を整えること☆

- ・教師が、出ているシャツなどを指で指し、何について伝えているかが分かるようにする。
- ・「どうしたらよいのかな？」などの言葉をかけ、自分が何をしなければならいかを考えることに気づけるようにする。

【学習面】

☆忘れもの、なくしものをしないこと☆

- ・持ちもののチェック表を用意し、本人が確認しながら準備できるようにする。
- ・少し大きめの通知入れを用意し、その中に入れるようにする。
- ・机の中に仕切りのある箱を設置し、文房具を分けて入れられるようにする。



☆文章題を解くこと☆

- ・大切な所に教師が印を付いたり、図や絵に表し、言葉で説明したりする。
- ・作文を書いたり、メモを取ったりする際には「か」と「や」、「い」と「り」など間違い易い文字を黒板や机に掲示しておき、字の違いに気づけるようにする。間違っている場合には、文字の違う箇所を指さすとともに、言葉で説明する。

【行動面】

☆他の人の会話の途中で話に入らないこと☆

- ・違う人と話をしている状況を伝え、どうしたらよいかを考えられるようにする。素直に応じられたら賞賛する。

☆バスや電車の入口にいること☆

- ・そのままいるとどうなるかを絵で示し、言葉で説明する。
- ・そのままいるとどうなるかを聞き、予測しようとする姿を引き出すようにする。